

演題番号：A5

凍結切片を用いた牛伝染性リンパ腫の病理組織学的検査の検討

○吉崎康二郎, 万所幸喜

京都府中丹家保

1. はじめに：牛伝染性リンパ腫の診断に必要な病理組織学的検査は、通常、ホルマリン固定パラフィン包埋 (FFPE) 標本のHE染色、必要に応じて免疫染色を行っている。FFPE標本では材料の処理などに一晚を要する工程もあり、解剖してから病性の判定までおおむね7日程度必要となる。そこで、鏡検までの時間が短縮可能と考えられる凍結切片標本を用いた本病の病理組織学的検査について検討した。

2. 材料および方法：FFPE標本のHE染色及びウイルス検査により地方病性牛伝染性リンパ腫と診断した2症例について、病理解剖時に採取した臓器やリンパ節の一部から凍結切片標本を作製 (染色まで -80°C で一時的保管) し、HE染色、マウス抗CD3モノクローナル抗体 (ニチレイバイオサイエンス、東京) 及びマウス抗CD79 α モノクローナル抗体 (ニチレイバイオサイエンス、東京) を用いた免疫染色を行い、FFPE標本のものと染色性等を比較検討した。

3. 結果：HE染色では、2症例ともにFFPE標本と同等に腫瘍細胞の形態学的分類が可能であった。免疫染色では、1症例はFFPE標本と同等にCD3陰性、CD79 α 陽性の腫瘍細胞を確認した。もう1症例では、FFPE標本と同等にCD3陰性

の腫瘍細胞を確認したが、FFPE標本に比べ腫瘍細胞のCD79 α の反応性の低下を確認した。また、FFPE標本では解剖してから病性の判定まで7日間程度要していたが、凍結切片を用いた検査では3日間程度で判定可能であった。

4. 考察：牛伝染性リンパ腫の病理組織学的検査に凍結切片標本を用いることにより、判定時間の短縮が可能となった。2症例のみの検討ではあるが、HE染色ではFFPE標本と同等に形態学的分類が可能であることが確認できた。免疫染色では、安定した染色性を確保するため反応条件等の精査が必要なのが示唆された。今後も症例数を増やし最適な反応条件等を検討していきたい。